

ワークショップ

固有名と確定記述：言語哲学及び論理的観点から

オーガナイザ 黒川英徳 金沢大学

提題者 藤川直也 首都大学東京「態度文脈における固有名」
竹内泉 産業技術総合研究所 「聖徳太子と井伊直虎に言語哲学者
は何を思うか」
田村高幸 千葉大学「名前概念への要請を明晰化すること—
名前論理学 (Calculus of Names) と確定記述」

名前と確定記述をめぐるフレーゲ、ラッセルらの議論は、現在の分類で言うと論理学の哲学、哲学的論理学、言語哲学などに対応する分野を横断するものであった。それに対し、クリプキの「名指しと必然性」以来、名前と確定記述に関する議論は主に言語哲学の中でなされてきた。クリプキの議論は単に言語哲学的な論点にとどまらず、形而上学、心の哲学にも関わる様々な論点を含むものではあるが、それでもなおクリプキの議論の影響下にある、自然言語における名前の振る舞いに関する議論は現在、言語学との学際的な観点を含む形で、言語哲学の領域において最も盛んになされている。

しかしながら、クリプキの議論の基本的なアイデアは、自然言語における名前（固有名）を様相一階述語論理の可能世界意味論における固定指示子と類比的なものと考えたというものであった。名前と確定記述に関する現在の議論の多くがクリプキの元来の議論とはすでに大きく異なるものとなっているにせよ、それらは様相一階述語論理の可能世界意味論を背景として成立したものである。それ故、それらの議論が様相一階述語論理及び可能世界意味論の枠組みから強い制約を受けている可能性は否定できない。

では、クリプキによる当初の哲学的議論の論理的な背景を自明のものとし、別の考え方を採った場合、名前と確定記述をめぐる議論はどのようなものとなるのか？ これは現在でも再検討するに値する問題であるように思われる。

本ワークショップでは、クリプキが採用していた様相一階述語論理の可能世界意味論とは異なった論理学の立場に基づき、名前と確定記述に関して、今日言語哲学で主流となっている議論とは異なった観点を提示する。そのことにより、名前と確定記述に関する議論の持つ可能性をより広い視野から見直すことを目指す。